談話室

木曽御嶽山で出合った生き物たち

8月下旬，長野・岐阜県境の木曽御嶽山に登った。木曽節に「夏でも寒い」と歌われるこの名峰は標高3,067m。日本で14番目の高さだが，ロープウェイや車を利用すれば標高2,000m以上の地点から出発でき，登山道もさほど険しくない。それなりの体力さえあれば初心者にも十分登れる優しい山だ。

山頂からは北，南，中央の日本アルプスに加え，八ヶ岳や加賀の白山，遠くは富士山まで一望できる。中部山岳地方のど真ん中にある独立峰ならではのぜいたくな眺望だ。

一方，ここは約1,300年前に役小角が開山したと伝えられる山岳信仰の聖地であり，白装束に金剛杖の登拝者も目立つ。「日本百名山」で深田久弥は「全くここは信仰の山，庶民の山であって，ピッケルに登山靴のアルピニストは，疎外者のような感じである」と書いた。同書の出版から既に半世紀近く，今はカラフルな登山ウェアに身を包んだ山ガールも多い。筆者も不信心なレジャー登山者に過ぎないが，一心不乱に祈祷する修験者らのそばを通る時は，神聖な領域を侵しているような後ろめたい気分にさせられる。

聖と俗，老若男女が入り乱れ，少々にぎやか過ぎる感もあるが，御嶽山自体は雑多な人間たちをおおらかに受け入れているように見える。どっしりとして複雑な山容が，そんな包容力を感じさせる。

半面，御嶽山には荒々しい横顔もある。有史以前から1979年まで何度も噴火を繰り返し，その火山活動が摩利支天山や継子岳など一連の外輪山と一ノ池から五ノ池までの火口湖を作った。山頂に近い地獄谷からは今も時折，噴気（水蒸気）が上がる。

当然，山頂に連なる稜線上は乾いた火山性の砂礫地だが，荒涼とした景色の中に咲くイワギキョウやコマクサなどの可憐な花が登山者の疲れを癒やしてくれる。筆者が訪れた時，チングルマの白い花はもう終わっていたが，モジャモジャの羽毛を広げたその実が涼しげに風にそよいでいた。

そんなポピュラーな高山植物とは別に，一面に青々と生い茂る草が気になった。山小屋にあった図鑑で調べてみると，タデ科の「オンタデ」という植物だった。御嶽山で発見されたため，そんな名前が付いたそうだ。山菜として食べられ

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/

るイタドリの丈を短くしたような姿で，雄株は白，雌株は淡紅色の地味な花をつけていた。他の高山植物のような繊細な美しさはないが，乾ききったやせ地にしっかりと根を張るたくましさに感心した。

更に調べてみると，オンタデは裸地に最初に侵入する「パイオニア植物」の一つだと分かった。乾燥や栄養不足に耐えて力強く繁殖し，他の植物の生息環境を整えるのがパイオニア植物である。いわば緑化の一番バッターだ。

ちなみに，刺身のツマや薬味に使われるヤナギタデ（ホンタデ）をはじめタデ科には有用な植物が多い。前出のイタドリ，薬草のダイオウなどもそうだが，一番はソバだろう。稲作に不向きな寒冷地でも育つため，かつては山村の食生活を支える重要な作物だった。山麓の木曽町でもそばが名物で，木曽福島駅の近くには享保元年（1716年）創業という老舗もあった。

「タデ食う虫も好き好き」ということわざがあるが，想像を超える厳しい環境にも独自のやり方で適応する生物がいる。青森県の恐山にある宇曽利湖の湖水は，やはり火山性ガスの影響で普通の魚が生息できないほどの強い酸性だが，ウグイが住んでおり，生物学上の研究テーマにもなっていると聞いたことがある。

御嶽山ではホシガラスを何度も見かけた。名前の通りカラスの仲間で，黒っぽい体に白い斑点がある大型の鳥だが，ライチョウなどと同様，高山にしかいない。

ホシガラスはハイマツの実を食べているらしい。ハイマツは，いわゆる森林限界（日本アルプスで2,500～2,600m）より高い場所に生える唯一の樹木だ。小泉武栄著『山の自然学』（岩波新書）によると，ホシガラスはハイマツの実を見晴らしのいい岩の上に運び，そこで食べたり，蓄えたりするという。寒風が吹きつける高所では，さすがのハイマツも実をつけることができないが，ホシガラスの手（羽）を借りることで生息域を広げてきたらしい。見事な共生関係といっていいだろう。

こうした複雑で精妙な生態系も，初めは少数のパイオニアから始まり，長い時間をかけて豊かな多様性を獲得してきた。もし，生物界が単なる弱肉強食の世界なら，生物種の数はむしろ減り，生態系は単純化していくはずだ。そうならないのは，生き物たちが競争しながらも互いに支え合い，それぞれの居所を見つけて上手に住み分けているからなのだろう。そこが人間界と違うところかも知れない。そんなことを考えながら山を下りた。

（（株）農林中金総合研究所 特任研究員　行友　弥・ゆきとも　わたる）

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/